
春と秋

まるは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春と秋

【Nコード】

N8880Y

【作者名】

まるは

【あらすじ】

怒りのために命を捨てようとした娘と、それを拾った男。男が彼女に教えてくれたのは――「ぶつとばし方」だった。

大きな町の「外」で暮らす、二人の物語。

とりあえず、1章完結方式で2章くらいの長さの予定。気が向いた時に増えるかも、くらい。

千の秋 0

時は、仁大皇帝^{じんだい}の御世。

東は東疎^{とうそ}の地から、西は間奈留^{まなる}の果てまでをひとつとした、大神^{おおか}来^{むら}という国があつた。

多くの戦乱を経て統一されたその国は、その頃の名残で各町は大きな壁で囲まれ、人々はその中で生活をしていた。

田畑までも内包する巨大な町は、外敵を完全に遮断し、長い籠城にも耐えられるように作られているため、よその町へ行く用がない限り出る必要はない。

一生を、町の中で終える者も数多くいる。

他の町へ行く時は、役所へその旨を申請し、許可証をもらわねばならない。

ならず者を、町の中に入れないようにするためである。

では、町の外に住んでいる者はいないのか。

答えは——「いる」、だ。

山や海での生活を生業とする者。

よその地から、移民してきた者。

町から、何らかの理由で許可証なしで出て行った者。

彼らは、「外」の人間として、厳密に「内」とは違う法体系の中に置かれることとなる。

これは、そんな町の「外」に住む者の物語。

千秋 1

「だめだ、だめだ！ 許可証を持たぬ者を、入れることは出来ん！」

ぬうと立つ門番二人は、千秋ちあきの前に立ちふさがっていた。

標準よりも小さい16歳の少女にすぎない彼女からすれば、彼らは鬼のように大きく恐ろしい者に見える。

しかし、通してもらえないからと言って、「はいそうですか」と、回れ右出来ない理由が、千秋にはあった。

「どうしても、内町うちまちのお役所に、申し上げたいことがあります。それさえ終わればすぐに出ますので、どうかお願いします！」

大男の背にそびえるのは、門。

その門の両側に広がる、高い高い石組の壁。

堅牢な壁で覆われた、守られた町。

千秋は、その中にどうしても入らなければならなかった。

粗末な着物を帯一本で縛りつけただけの、貧乏農民の末娘である彼女は、鼻緒のちぎれた草履を手に持ち、門番の頑なな心を何とか緩めようと必死に訴える。

対する門番は、この国の軍では一般的な、鑄造された量産型の兜と鎧を身につけている。防具だけでなく、槍まで持っている。

兜のてっぺんから伸びているひれは、色あせた緑色だ。

元々は鮮やかな緑で、西域を担当する軍の所属であることを表していた。

この町の治安を維持するために、中央から任を与えられた者たちだ。

彼らより身分の高い者からの命令、あるいは相当な額の賄賂でも積まない限り、彼らの心を動かすことは難しいだろう。

だが、その両方を持ち得ない千秋は、ただ懸命にお願いするしかないのだ。

「だめだと言っておるだろうが！」

すがりつこうとする千秋を、門番はいともたやすく跳ね飛ばした。

軽い彼女の身体は、まるで毬のように放り出され、地面にすっ転がる事になる。

身体のうちこちが痛むが、千秋はそれでも諦めきれない。

立ち上がり、門番にもう一度懇願しようとした時。

「これ以上、我々の手を煩わせると、本当に容赦しないぞ」

門番は、手に持った槍を構える素振りを見せた。

千秋は、さすがに躊躇した。

ここで、自分が死んでは誰が役所へ訴えるのか。

だが、引き下がっては、結局同じことになる。

千秋は、着物の袂たもとから、手紙を引っ張り出した。

彼女の父が書いたものだ。

役所に訴えたいことの仔細が、ここに記されている。

自分が入れなくとも、この手紙が届けば何とかなるかもしれない。

「では、これを役所の方に渡してもらえませんか？」

紙を手に入れるのも難しい中、何とか用意したものである。

しかし、門番二人は顔を見合わせ、嫌そうな表情を浮かべてみせるではないか。

「軍人を、タダ働きさせる気か？」

告げられた言葉は、堂々と賄賂を要求するものだった。

人はともかく手紙は入れてやらないでもないが、タダでは駄目だと言っているのだ。

千秋は、上に立つ者の中にひどい人間がいるのは知っていた。

下の者を虐げ、踏みつけることなど何とも思っていない人種だ。

だが、そんな人間ばかりではないと、心のどこかで思ってもいたのだ。

何故なら、幼少の時に過ごした町では、偉い人の中にもいい人がいたのを見て来たから。

だが、千秋の前に立ちふさがるこの軍人たちは、平民よりほんのちよつとだけしか偉くないにも関わらず、腐りきっている。

ギリと、奥歯を噛みしめて、彼女は怒りを喉元までせり上がらせた。

次に彼らが言うことを、千秋は知っている。

「まあ、そうだな。金がないって言うんなら……身体で払ってもいいぞ」

視線が、彼女の身体を舐めるように動いた。

痩せて、凹凸など皆無に等しい彼女の、こんな鳥ガラのような身体であっても、そんな目で見る事が出来るのだ。

ああ。

どこも、同じだった。

千秋は、手紙を握りしめて怒りにわななく。

喉元でとどめていた怒りが、いまにも唇から炎のように飛び出しそうになるのを感じながら、彼女は一步踏み出していた。

こんな世になんて。

「お金の代わりに、私の命を差し上げます……」

こんな世になんて——未練なんかない。

千秋は、門番に向かって駆け出した。

反射的に突き出される槍の先に。

彼女は。

飛び込んだ。

千秋の世界は、一瞬にして目まぐるしく変化した。

自分の身体が突然一回転し、鈍く激しい音と共に地面に落ちていたのだ。

地面に尻もちをついたまま、彼女はほけつとその光景を見ていた。

自分と槍の間に立つ、炭を背負った後ろ姿。

槍の穂先はへし折られ、千秋の足元に力なく落ちていく。

わなわなと震えている軍人たちを放置して、その人は千秋の方を振り返った。

「怒りは、そんな風に使うもんじゃないよね」

明るくあっけらかんとした声の、糸目の男がそこにはいた。

千の秋 2

「ありがとうございます」

千秋は、おそろおそろ礼を言った。

山の中腹にある炭焼き小屋らしき粗末な家は、建てられている場所こそ違え、自分の家を彷彿とさせる。

煮炊きに使われるだろう囲炉裏に火が入れられると、疲れきった身体がほっとするのが分かる。

「お礼なら、もう何度も聞いたから、もういいよ」

桶の水を鍋に入れ、糸目の男はそれを囲炉裏へと吊るす。

門の前で大立ち回りをしでかしてしまった彼と千秋は、すぐさま門番に取り押さえられそうになり、慌てて逃げ出したのだ。

千秋が逃げたというよりは、この男に手を引つ張られ、付き合い合わせたと言った方がいいか。

いざ、町から離れてしまうと、千秋は途方に暮れてしまった。

目的を果たすことも出来ず、死ぬことも出来ず、不完全燃焼の怒りの行き先はどこにもなくて、本当に生きた屍のように突っ立ってしまったのである。

そんな千秋の頭に、糸目の男はぽんぽんと手を置いてくれた。

「とりあえず、僕の家に行こうか」

魂が抜けたままの彼女の手を、炭を背負った男が引っ張って行ってくれる。

きっと、彼は町へ炭を売りに来たのだろう。

町だけでは賄えない商品を売る者は、町に入る許可証を得ることが出来る。

おそらく、彼はそれを持っていたに違いない。

なのに、千秋の無謀な事に飛び込んできてしまったせいであんなことになり、しばらくは町への出入りは出来ないだろう。

とぼとぼと手を引かれて歩きながら、少しずつ正気に戻ってきた千秋は、目の前の男に申し訳ない思いでいっぱいになった。

「どうして……止めたんですか？」

助けてもらって余計なお世話と言いたくはなかったが、結果的には男にとっても千秋にとっても良い結果にはなっていないように思えた。

「言っただろう？ 怒りの使い方を間違えてるって……あそこで君が、怒りに任せて死んだって、ただの犬死にじゃないか」

握られた手に、少し力がこもった。

背はそれほど大きい訳ではないが、男の手は大きく、そして温かだ。

悪い人ではないのだろう。

いや、きつといい人だからこそ、無謀な千秋を身体を張って止めてくれたに違いない。

ただの犬死に。

それは、心のどこかで分かっていた。

自分の死など、あの軍人たちの心を動かす材料にはなりはしないのだ。

もう片方の手に握った父の手紙を、千秋はもつとぎゅっと握りしめた。

「10年くらい前から、外村そとむらがたくさん作られ始めたんです」

千秋は、炭の背に向かって呟いていた。

彼の背は、俗世の人のように思えなかったのだ。

貧しい者も助けてくれる、聖人が菩薩の化身ではないかと。

「新しく土地を開墾して田畑に変える。開墾した者に土地は与えるということ、内町うちまちに住んでいた次男坊の父は、喜んでその外村作りに参加しました」

千秋が、小さい頃の事だ。

内町に人が増えすぎ、食料の自給が困難になってきたため、国はその両方を同時に解消するべく政策を立てた。

内町の人手を外に出し、彼らに農地を作らせるという方法だ。

ただで土地が手に入る。

それは、跡を継がない次男以降の男たちの、心を動かすものがあったようだ。

家族を連れて彼らは外に出て、苦勞して苦勞して田畑を開墾し、そしてそこに作物を実らせるに至った。

だが、政策には無責任な部分があった。

国は、新たに開墾した田畑から、面積に応じての一定の税金を取り立てることのみにしか興味がなかったのだ。

新たに出来た外村の秩序や治安は、全て地方の権力者をむらおき村長に据えて、彼らに任せたのである。

確かに、土地はそれぞれの者に与えられたが、同時に村長は重税も課した。

とても、家族が食べて行けないほどの税の重さだ。

外の村は壁に囲まれていないため、人々を守るために強い者を雇わなければならないという理屈で、国のものとは別に税を徴収した

せいである。

雇われた荒くれ者たちは、治安を守ると同時に、彼ら自身が治安を乱す種となり、ちよつとでも逆らう家があれば、ひどい目にあわされることとなった。

更に、農民の足元を見るかのように、こつ言い放つたのだ。

『税金が納められない者は、娘を納めよ。娘を納めた者は、向こう2年の税を減免してやろう』

農民たちは、怒り狂った。

反乱を企てた。

だが、彼らはそれを予見していたのか、『不穏な動きをしている輩について報告した者も、1年の税を減免してやる』とも言ったのである。

そのせいで、他の村人を売る者が出た。

元々、開墾のために集まった者たちであり、古くからの付き合いがあるわけではなく、一枚岩ではないところを狙われたのだ。

こうして、村は横のつながりも断たれ、誰も信じられない状態になっていき、ついには食うものに困って娘を差し出し始めたのだ。

こうなると、未来は暗く閉ざされたものとなる。

圧制を覆すことも出来ず、かといって、娘の数にも限りがある。

餓死者が出たり、逃亡者も出たりする。

耕す者のいなくなった土地には、また何も知らない内町の人間たちが、騙されて連れてこられるのだ。

横でつながれないのならばと、千秋の父は内町の役所へと窮状を訴える直談判の手紙を書いた。

それを、家にいる最後の娘に託したのだ。

最後の娘。

それは、もし一家が重税に押しつぶされそうになった時に、姉たちのようにあの家に差し出され、慰み者にならねばならないということ。

そうなる前に。

父の手紙を持って、千秋は走った。

一番近い内町まで丸一日、握り飯一つと川の水だけでようやくたどりついたのだ。

結果は、ひどいものだったが。

そして、死にそこなった千秋はいま、糸目の男と向かい合っている。

怒りの余り、この世を見限った彼女の前にいるのは、菩薩の化身

なのだろうか。

ゆっくりと鍋の湯が沸いていくのを、千秋は見るともなしに見ていた。

「思ったんだけどね」

毛先の跳ねたざんばら髪を、男は一度かきまわした。

声は、至って明朗だ。

千秋の村の不幸な窮状を聞いてなお、そんなものに振りまわされる様子などない。

そして。

「悪い奴は、ぶつとばしていいと思うよ」

あっけらかんと、とんでもないことを口にしたのだった。

千の秋 3

「ぶっ……とばす？」

思わず、千秋は頓狂な声で返してしまった。

余りに明るく、しかしひどい内容を聞いたからである。

「そう、ぶつとばす」

ぎゅつと拳を作って、男はにこにここと笑う。

彼女は、思わずその拳を見つめた。

それは、この人がぶつとばしに来てくれるということだろうか、と。

彼は炭焼き職人のようだが、非常に強い力を持っているように見える。

本当に間近だった槍から彼女を引きはがして転がしつつ、その穂先をへし折ったのだから。

糸目の男が本気になったら、少々相手など本当にぶつとばせそうだ。

「ああ、違っよ」

千秋の瞳に浮かびかけた、希望のようなものを見て取ったのだろ

うか。

彼は、ぱつと自分の拳を解いた。

「拳でぶつとばすのは……」

にこにこしながら彼は、指でちょいちょいとこちらを指してくる。

そう、千秋の方を。

思わず、彼に差されている先を見た。

それは——自分の右手だった。

手を開いて閉じて、それからもう一度男の方を見ると、うんうんと頷いている。

「そうそう、ぶつとばすのは……君の拳で、だよ」

時が止まる、瞬間だった。

考えたこともないことだったし、出来るとも思えないことだ。

千秋は、ただの農民の娘に過ぎない。

村に圧政を強いる屋敷に乗り込んだところで、拳一発当てることも出来ないのは明白だった。

「で、できま……」

「出来るよ。死ぬ気になれば、出来る」

否定の言葉は、より強い肯定に飲み込まれる。

はっと、声に引き寄せられるように、彼を見た。

笑ってはいるが、冗談ではない。

明るくはあるが、茶化してはいない。

彼は、本気で言っているのだ。

「ぶつとばし方は……そうだね、僕が教えてあげよう」

糸目の目を更に糸にしながら、彼は千秋に微笑んでくれた。

そこから、千秋と『糸目先生』の付き合いが始まった。

誰に習ったのだろう。

糸目先生は、武道の心得があつた。

しかも、自分より大きい者を簡単に転ばせることが出来る、まるで魔法のような技だ。

千秋は、何度もその身で練習台となり、気づいたら地面にすっ転

んでいる羽目となる。

この技を会得できれば、彼女も大男相手に怯む必要もなくなるかもしれない。

そんな夢を、千秋は彼の技に見た。

一度は捨てた命なのだから、血のにじむ努力をすれば、一撃浴びせられるかも、と。

死ぬのは、その後でも出来る。

そう彼女は、開き直った。

のだが。

「うひゃあ!」

千秋は、奇妙な感触に飛びあがることとなる。

いつの間にか後ろに回った糸目先生が、千秋の両脇から手を回し、彼女の胸に触っていたからだ。

「せ、先生! 何するんですか!」

反射的に肘鉄を食らわし、彼から離れながら、着物の前を必死で合わせる。

ときどきとびくびくで、自分の全身が震えているのが分かった。

彼もまた、こんな鳥ガラの自分をさういう目で見るのかと衝撃を覚えていたのだ。

肘鉄を食らったところで、大して効いていない顔の糸目先生は、ふうとため息をついた。

「君は、男たちの中に乗り込んで行くんだよ。みんな真正面から、正々堂々と戦ってくれるわけじゃないじゃないか」

正々堂々とししか聞こえない明快な声に、千秋は全身で納得した。

あの無法の男たちであれば、何でもやるに違いない、と。

彼は、それを千秋に教えようとしてくれているのだ。

どんな卑怯な手にも、彼女が動じないように。

「わ、分かりました、先生！ 疑って済みませんでした！」

ぎゅっと両の拳を作って、彼女はどんな仕打ちにも耐える決意を、改めてしたのだった。

「あー、いや……その……」

先生は、何故か少しバツが悪そうに何かを言いかけたが、「さあどうぞ」と、千秋がぺったんこの着物の胸を差し出す様を見て、大笑いを始めてしまう。

「せ、先生？」

いつものにこにこではなく、ゲラゲラと笑い転げる様は、彼女を
啞然とさせた。

「いやいや……悪い悪い。ちょっとふざけすぎたね……まあでも、
その意気だよ」

親指を立てて笑顔を向けられても、千秋には何のことやら分から
ない。

はあと曖昧に答えながら、彼女はそれから加わった、先生の性的
な嫌がらせにも耐えつつ修行を重ねるのだった。

「おは……よー」

『よー』のタイミングで尻を撫でられる。

真後ろに立たれるまで、近づいて来ているのに気付かずに、千秋
は何度となく尻を撫でさせてしまう。

『おは』という二言葉分の猶予があるにも関わらず、避け切れない
のは自分がどんくさいからだろうか。

こんなことでは、まだまだ男をぶつとばすことなど出来はしない。
頑張らなきゃ。

千秋は、夜な夜な修業の流れを頭の中で繰り返しながらも、疲れ
に耐えかねて、かくりと眠ってしまうのだった。

そうして何日も過ぎるに従って、彼女は糸目先生のことを心から

信じられる人だと分かった。

彼が本気になれば、彼女の貞操など紙くず同然である。

なのに、先生はまったく千秋に手を出さなかった——修行の時は別として。

言われた通りに出来なくても、彼は声を荒げたり怒ったりしない——顔の構造と声のせいかもしれないが。

ただ、じつくりと粘り強く、そして時々性的な嫌がらせで千秋に悲鳴をあげさせながらも、余り深刻にならないように修業を進めてくれた。

力技の武道ではない分、人の動きや流れが大事で、とにかく糸目先生と向かい合った。

先生が、わざと力で押してくる。

その手をひねり、一回転させて倒すのだ。

急所の勉強もした。

手数を少なく、相手を倒す技。

千秋は、多くの男を同時に相手にしなければならなくなる。

それを見越して、最低限の力で相手を動けなくさせていくのだ。

先生は、どうしてこういうことを知っているんだろう。

それ以前に。

どうして、自分に教えてくれるんだろう。

千秋の中に、そんな疑問がふわりと浮かんで、そして消えていく。

先生のことを知りたいと思ったが、知った先に何かがあるわけでもないことにも気づいてしまったのだ。

ひどい男をぶつとばせたところで、千秋がそのまま村に残り続けられるわけもない。

村を出たところで、彼女に行く宛てがあるわけでもない。

ぶつとばした後、男たちに殺されるか、村を出てのたれ死ぬか。

結局、最後はそんなものだろう。

そんな千秋の沈む考えは、長くは続けられない。

いつの間にか背後に回った先生に、「隙だらけだね」と、太ももを撫で上げられていたからだ。

「ひゃー！」

どうして、情けない悲鳴が反射的に出てしまっただろうか。

千の秋 4

糸目先生が、箆^{たんす}笥を漁っている。

夕餉を終えた時間、囲炉裏で燃える炎だけで探し物は大変そうだ。

手伝おうかと千秋が立ち上がりかけた時、「あつたあつた」と、先生は何かを引っ張り出した。

「はい」

差し出されたのは、赤地に白い花の描かれた着物。

晴れ着ほどの美麗さではないが、普段使いにしては良い物だと分かる。

「え？」

差し出された女物のそれを、反射的に受け取ってしまいながらも千秋は意味が分からずに先生を見上げる。

「あげる。ちょっと大きいかもしれないけど、おはしよりで調整出来るよね」

にこにここと、あっけらかんと。

ただ「あげる」ために出した以外の何の思惑もなさそうな、幸福が絵になったような笑顔。

菩薩のようだと思ったこともあるが、千秋はここ数日は少し考えを改め始めていた。

彼は、人である、と。

悩みや苦しみが無いなんて、人にはありえない。

いまはこんな風に、笑顔を浮かべている彼であったとしても、過去もまたそうだったわけではないのだ。

事実、こうして筆筭から女物の着物が出てくる。

ここに、女性がいたということの証拠。

先生は、年齢が分かりにくい顔をしているが、十代なんてありえない。おそらく二十代後半くらいではないだろうか。下手したら三十代。

女性と暮らしていたとしても、何らおかしくはなかった。

その女性が、いまはどうなったかは分からないが、少なくとももう彼の元にはいないのだ。

「こない物……もらえません」

先生の悲しい部分に触れた気がして、千秋はついそれを押し返そうとした。

これを着た自分を見て、彼は昔を思い出してしまうのではないかと思ったのだ。

「討ち入りする時に着てよ。思い切り綺麗に着飾って、ぶつとばしておいで」

なのに。

先生は、愉快でしようがないという風にケラケラと笑うのだ。

千秋が、この着物で男をぶつとばしている姿を、想像しているのだろうか。

そっか。

彼女は、着物を見つめた。

そっか、死に装束にくれたんだ。

女として生まれて十六年。

一番のよかった頃と言えば、幼少の内町住まいの時だった。

商家の次男坊だった父は兄の店で働いていて、身内びいきの援助の入った給金のおかげか、それなりの暮らしが出来ていた。

その頃は、姉たちのおさがりではあるが、千秋もよい着物を着ていた気がする。

これを着て、死ぬならいいか。

最後の最後に、力を貸してくれた先生に見守られて死ぬるように

感じた。

先生の昔の女性への悲しい思いも、それと一緒に死ぬといい。

「ありがとうございます、私、頑張ります！」

ぎゅっと綺麗な着物を握りしめ、彼女は糸目先生を見上げた。

「あー……なんか、また変な事考えてるでしょ」

そんな千秋に、彼は苦笑いを浮かべていた。

「あの着物、着ないの？」

相変わらず、着たきりスズメのボロ着物で鍛錬に励む彼女に、糸目先生が問いかける。

「はい、あれは一張羅ですから。大事な最後に着ま……うっひゃ！」

返事が終わる前に撫でられる尻に飛びあがりながらも、千秋はその手を掴んで一回転させていた。

ほとんど体重を感じないほど、とすつと彼は落ちる。

わざと技をかけられたのだと分かるほど、それは静かだった。

さすがです、先生。

性的な嫌がらせから技の終わりまで、きつと頭の中で台本が出来上がっているのではないかと思えるほど、素晴らしい流れだった。

逆に、その台本のために、まったく鳥ガラな身体を触らなければならない先生が、かわいそうに思えるほどである。

ご愁傷様、と言うべきか。

もらった着物は、確かに彼の言うように少し大きかった。

おそらく、千秋よりも肉づきのいい女性のものだったに違いない。

さぞや先生は、彼女の身体に触った時に、悲しい気分を味わっているだろうと思えたのである。

だが、これでも少しは肉がついてきたのだ。

ここの食事は、主に山菜や先生が捕まえてきた鳥や獣の肉。

外村にいた時とは比べ物にならないほど、おなかいっぱい食べられていた。

家族のことを考えると、後ろめたく思うほど。

死んだ気になって戦う修行に明け暮れるはずの千秋だったが、ここは余りに居心地が良すぎる。

死と等価交換したのならば、ここは修羅の道でなければならな

ったはずなのに、先生は明るくて優しいし、食事もおいしい。

足りないものなんて、何も気にならないほど、ここは幸せだった。弱い心が、彼女の足を引っ張っている。

この先にある、いつか必ず来る修羅の道を避けたいと思うんだ。

それは、この幸せな時間が産みだした弊害でもある。

だが、千秋は行かなければならない。

父のため家族のため、犠牲になった姉たちのため、自分も身を捧げるつもりだったのだから。

そして。

「うんうん、そろそろ及第点かな」

地面に転がったまま、先生がにこにこして言った。

転がした千秋は、それを少し茫然としながら聞いていたのだ。

ついに、その時が来た、と。

千の秋 5

夕方の冷たい山川の水で、身を清める。

泥や埃と共に、俗世の全てを洗い流すように。

食生活の改善のおかげで、少しだけふくらんだように思える胸を、千秋は皮肉に見下ろした。

綺麗になった身体を、糸目先生にもらった着物で包む。

髪を結いあげ、山の赤い実のついた枝をかんざしにして差して止める。

新しい草鞋は、自分で作ったもの。

長い枯れ草を、よってこしらえている時、心は静かだった。

怒りとか憎しみとか、確かにあったはずなのだ。

薄れてなくなったわけではない。

だが、それは違うものに姿を変えて、自分の心の奥底に座っている気がする。

草鞋をはいて、千秋は小屋へと戻った。

ちょうど夕餉の仕度をしていた先生が、「おかえ…」と言いかけて言葉を止める。

いつも小汚い姿ばかり見せていたので、きっと驚いたのだろう。

馬子にも衣装と言うところか。

「……」

静かな静かな夕食になった。

だが、寂しい夕食じゃない。

千秋は、目の前に座る先生の顔を時々見ながら、笑みを向けられると、自然に笑みで返していた。

まるで。

この一瞬だけは、何十年も連れ添った夫婦のよう。

糸目先生は、そんなことを言われても困るだろうが、彼女にとってはそれがたとえ疑似的なものであったとしても、必要なものと思えたのだ。

あるはずだった、誰かとの未来。

それを、ささやかに千秋は体験することが出来たのだから。

食事と片付けが終わって、改めて彼女は囲炉裏の前で先生に向き直った。

きちんと正座をし、そして両の指先を板張りの床につく。

「これまで、どうもありがとうございました。命を救って頂いたこと、教えていただいたこと……感謝は言葉に尽くせません」

いまこうして、静かな気持ちでいられるのもまた、先生のおかげだ。

彼は、憎しみの戦いは教えなかった。

いつも冗談混じりの性的ないやがらせをしながら、千秋の肩を抜いてくれた。

おかげで、短い間だったが、生き延びたことを後悔せずに済んだ。

無為に槍に飛び込んで死ぬような、後ろ向きな死ではなく、自分のまっすぐな心のまま正々堂々とぶつかっていく、前向きな死の道を選ぶことが出来た。

全て、この炭焼きの男のおかげである。

彼が何者であろうとも、この感謝の心は変わりはない。

「……」

真剣な気持ちが、伝わったのだろうか。

頭を下げているので表情は分からないが、先生は何も言わないでいてくれる。

「私に何か出来ることがあれば、恩返しがしたいのですが……」

とくんと、自分の胸が跳ねる。

心のどこかで、奇妙な覚悟があった。

ここでもし、彼が自分を女として求めるようなことがあれば、それを受け入れようと。

いや。

心のどこかで、それを願っていたのだ。

この人になれば、最初で最後の女の身の自分を、捧げても構わないのではないかと。

静かな静かな時間が流れる。

パチと囲炉裏の炭がはぜ、小屋の外をわずかな風が吹き抜け、戸をカタカタと揺らす音が、とても大きく聞こえるほど。

「存分に……ぶつとばしておいで。それが、僕の願いでもあるよ」

糸目先生は、最後まで素晴らしい人だった。

俗っぽい女の身よりも、彼女がやろうとしていることの応援をしてくれるのだ。

分かっていたことだった。

千秋は、ゆっくりと顔を上げて彼を見た。

糸目でよく表情が分からないながらに、やさしく微笑んでくれている気がする。

「はい、ぶつとばしてきます」

さようなら、先生。

さようなら。

千秋は、夜も明ける前に起き出して、最後にもう一度布団に横たわる糸目先生に深く三つ指をつくと、そつと小屋を出たのだった。

千の秋 6

千秋は、家には寄らなかった。

これからやることが、自分の家に迷惑をかけることになるのは分かっていたからだ。

こんな綺麗な姿を知る者は、村にはほとんどなく、彼女は遠巻きな村人たちの視線を感じながら、村長とは口が裂けても呼びたくない男のいる屋敷へと足を踏み入れたのだった。

この辺では見ない、きちんとした身なりの女に、屋敷の男たちは多少引き気味に見ている。

正式な客人だと、勘違いしているのかもしれない。

「長さんに、お話があるのですが」

これほどすんなりと入れるとは思っていなかった千秋は、またも先生に感謝することになる。

たかが着物一枚。

たったそれだけの違いで、自分に対する扱いが何もかも違うからだ。

どんな風に、彼女の言葉が奥へと伝えられたのかは分からない。

だが、『綺麗な着物を着た、若い女が訪ねてきた』という事実だ

けでも、あの男は食いつくだろう。

でなければ、女を差し出せば税を減免するという、馬鹿げたことを言うはずなどないのだから。

そんな彼女の予想は、幸いなことにその通りだったようだ。

通された座敷では、脇息にもたれ女を横抱きにした、ヒキガエルみたいに太って醜い男が待っていた。

しゃんと立つ、千秋を上から下まで眺めた後、いやらしい舌なめずりをしている。

同時に、千秋も見ただの。

男に抱かれている女が、青ざめていくのを。

彼女には、分かったのだろう。

自分が、誰であるか。

何しろ、そこにいた女は——子どもの頃からずっと一緒に暮らしてきた千秋の姉だったのだから。

大丈夫よ、お姉ちゃん。

いまの姿を、千秋に見られなくなかったのと、どうしてこんなところに来たのかと、理解出来ずに混乱しているのが分かる。

いまの姉は、憐れまれることも望んでいない。

それどころか、女として屈辱の生活を送りながらも、死ねないでいる自分を憎んでいるようにも見えた。

死ねなかったのは、千秋も一緒だ。

ただ、彼女は運がよかった。

糸目先生と出会え、幸せな記憶が積み重なったのだから。

こんな幸福な娘は、きっとこの村では自分だけだろう。

「別嬪さんが、何の用かな？ いや、用などなくてもいいのだがね」

姉を押しつけるように、男はこちらへと身を乗り出す。

田の畔で、ゲコゲコ鳴いている方がお似合いだろうに、この男は人の言葉をしゃべるのだ。

待ちきれないのか、すぐに立ち上がり、ニヤニヤ笑いながら千秋へと近づいてくる。

千秋は、ぺこりと頭を下げた。

「ぶつとばしに来ました」

先生のような糸目になることは、彼女には難しいだろう。

それでも、精一杯の恩返しを込めて、千秋は目を細めて笑みを浮かべたのだ。

「え？」

男の驚く顔を間近でみながら。

千秋は、男の喉仏めがけて拳を、ぶちかましたのだった。

完全に虚を突かれてモロにくらった男は、ぐらぐらする頭の揺れと急所の攻撃に耐えきれないように、どすんと大きな音を立てて昏倒する。

一瞬だけ。

その場には、静寂が広がった。

姉と、目が合う。

にこっと、微笑んで見せた。

「ちあ……」

姉が、自分の名を呼びかけた時。

「何だてめええ！」

控えていた男たちが、その場に飛び込んで来た。

振り出された拳を掴んで投げる。

先生に比べたら、何て遅くみつともない動きなのだろうか。

思わず、千秋がおかしくなるほど、彼らは美しくはなかった。

ああ、先生。

ころころと男たちを転がしながら、山にいる彼のことを思った。

千秋は、やりました。ぶっとばしましたよ。

ふふふ、あははと笑いがこぼれる。

心の底から、爽快な気分だった。

山の空気の中にいるように、すがすがしい呼吸が身体の中で繰り返されている。

だが、それは長くは続かない。

転がされた男が、彼女の足を掴んだ。

その男の足を踏んで逃れようとしたが、もう片方から別の男にはがいじめられる。

多勢に無勢。

ついに千秋は、完全に動きを封じられてしまった。

なのに、彼女は自分がにこにこしていることに気づいた。

まるで、先生が心の中にいるかのようだ。

「このアマ！」

首がもげるかと思うほど強く、ひっぱたかれる。

髪を掴まれ、せつかく木の枝で作ったかんざしが、床に落ちていくのが見えた。

大丈夫。

痛いけれど、怖くはない。

もらった着物が、乱暴に引っ張られる。

多くの雑音が、自分の周囲で繰り広げられているが、もう何も耳に入っていないかった。

あらわになった自分の片方の胸のことなど、もうどうでもよかった。

あと必要なのは。

最後のひと跳びだけ。

千秋は――舌に歯をかけようとした。

千秋 7

「あ、それはダメだから」

とぼけた声が、千秋の意識を現実へと突然引き戻した。

言葉とほぼ同じタイミングで口に手がつっ込まれ、舌を噛むのを止められてしまう。

あれ？

物凄い喧噪の中で、千秋の耳によく知った人の声が聞こえた気がしたのだ。

「そんなことは、僕は教えてないでしょ？」

幻聴かと思ったのに、もう一度はつきりと聞こえて来て、千秋は目をぱちくりと見開いた。

乱れた着物の自分の上に、のしかかっている男は――糸目だった。

千秋の口に手をつっ込んだまま、もう片方の手や足で、近づいてくる他の男たちを、子どもでもあしらうように跳ね飛ばしている。

「ふえ、ふえんふえー（せ、せんせー）」

これは、夢なのだろうか。

いや、もしや既に千秋は舌を噛みちぎっていて、死んでしまっ

いるのかもしれない。

だから、菩薩が先生の姿を借りて、自分を迎えに来たのかも。

「よしよし、よくぶつとばしたね。そのまま、少し待ってなさい」

ようやく口から手を抜いて、彼は千秋の上からどいてくれた。

「てめえ、どこから来やがった！」

刃物や槍まで持ち出してきた男たちに囲まれて、先生はにこにこ
と笑っている。

「あ、それいいね」

男たちの輪など、まったく興味もなさそうに、彼は足を踏み出す
と、自分に向けられていた槍を、何ともあっけなく奪ったのだ。

その次の瞬間。

床に転がっていた千秋は——見た。

いや、見えなかった。

目にも止まらないほどの速さで、先生が槍を一闪振りまわしたの
だ。

いくつもの男の身体が、まるで物干し竿の洗濯物よろしく吹き飛
んで行く。

先生は、武道の心得があるのだと、千秋はずっと思っていた。

だが、そうではないと分かった。

彼は、槍だろうが刃物だろうが、どんな武器も筆より簡単に扱うのだと。

投げられる小刀を掴んで簡単に投げ返し、男たちの身体に的確に突き立てていく。

的確に。

それは、眉間であつたり、喉元であつたり。

要するに。

確実に、人の死ぬ部位を狙っているのだ。

先生は、千秋に人のぶつとばし方は教えた。

急所も教えたが、刃物の使い方は教えなかった。

ぶつとばすことは教えても、人の殺し方を教えなかった男は、容赦なくその手を汚していく。

ばたばたと倒れる男たちと、笑顔の殺戮者に脅え、逃げ出す男たち。

生きて残っているのは、先生と自分と姉と——泡を吹いて倒れたままのヒキガエルだけとなった。

「いい、ぶつとばしだったよ」

槍を放り出し、へたりこんだままの千秋の前に、先生が膝を折って覗き込む。

ついさっきまで、笑みのまま簡単に人の命を奪って行った男。

だが。

屍累々な残虐な空間の中でも、千秋にとって何も変わらない糸目先生に見えたのだ。

「何で……来たんですか？」

また、助けられてしまった。

気持ちよく、死ねる瞬間があった。

先生を思い出しながら、先生にもらった着物で、この世を夢むでもなく充足して死ぬことが出来る時間が、すぐそこにあったのだ。

なのに、それを邪魔した目の前の男は、少し猫背になりながら顔を突き出してこう言った。

「そうだねえ……気持ちよく死なせなくなかったからかなあ」

まるで、千秋の心を読んだかのような言葉だった。

んーっと座ったまま、大きく伸びをした糸目先生は、姉に気づい

たようで視線を向ける。

「しばらく新しい長は来ないだろうから、家に帰るといいよ」

千秋の姉だとは知らない彼は、優しくそう言った。

彼女はおどおどしながら、まだ生きているヒキガエルを見る。

「ああ、そうだね」

糸目先生は立ち上がって、男の方へと歩み寄った。

「とりあえず、ここはつぶしとこうか」

ひょいと持ち上げた足。

ズダーン！

その気軽さとは裏腹の大きな衝撃が、部屋を揺らした。

先生の足は、ヒキガエルの股間に炸裂していて。

千秋も姉も、そのすさまじい光景に、あんどりと口を開け放ってしまった。

「さて」

その口を閉じきるより前に、糸目先生がこっちを向いた。

「僕はきつとお尋ね者になっちゃうから逃げるけど……君はどうす

る？」

ふわふわと軽い言葉。

お尋ね者になるということは、不幸の始まりのように感じるのに、彼にとってはそうではないようだ。

旅に出るくらいの気楽さだ。

彼がお尋ね者になるというのなら、原因をつくった千秋だって同じこと。

死に損なったのだから、生きる方法を探さなければならない。

生き残った先にあるのは、野垂れ死に。

そう考えていた千秋の目の前に――糸目先生がいる。

「わっ……私も一緒に逃げて……いいんですか？」

誘ってくれているような、気がした。

その一縷の望みに、彼女は反射的に手を伸ばす。

先生は。

そこらの男の下敷きになっていた千秋の髪を止めていた木の枝のかんざしを拾い上げ、ぼろぼろの彼女の髪に差してくれた。

「じゃあ、一緒に逃げようか」

にこり。

「はい！」

差し出される大きな手を握り、千秋は立ち上がって着物の乱れを直した。

「千秋……」

姉が、何か言いたげに呼び止めた。

先生の手を握ったままの彼女は、振り返って幸せな笑みを浮かべて見せる。

逃亡者になるはずなのに、いま、自分が世界で一番幸せな人間に思えたのだ。

「みんなによろしく言つといて」

そして、千秋は村を出た。

前に出た時と違って、一人じゃなかった。

大きくてあったかくて、そして残忍な手を持つ人と一緒なのだ。

そんな人と一緒なのだから。

鬼が出たって——怖くなかった。

【千の秋編 終】

春の 1

牛蒡ごぼうを拾った。

農民らしい日に焼けた肌と、やせっぱちの身体を持つ彼女の第一印象は、そういうものだった。

出会いは、恒例の町への炭売り。

前を歩く、牛蒡みたいな女の子の尻を見ながら、春一はるいちはのらりくらりと歩いていた。

許可証なんて、持ってないんだろうなあ。

そう思いつつも、とりあえず目は尻に固定している。

肉付きが足りないと、勝手に見ている側のくせに、文句を思い浮かべていた。

案の定、彼女は門の前で門番ともめ始めた。

外村の貧農の子が、その窮状を役所に訴えようとしているのだろう。

それくらいは簡単に見て取れたが、途中であきらめて帰ると思っていた。

もしくは、門番の下卑た要求に泣く泣く応じるか。

後味が悪いねえ。

春一は、どっちにせよ胸の悪くなる光景だと眺めていたのだ。

なのに。

突然、少女の全身が怒りに燃え上がったかのように、彼の目には映った。

あきらめるでもなく、身を渡すでもなく、少女は怒りの炎を纏ったまま、槍の先に飛び込もうとしたのだ。

ちよつとまっただああ！！！！

おかしいから！

怒ったのに、そういう行動に出るのは、違うでしょおお！！！！

もう、ほとんど反射だった。

玄人芸人の突っ込みよりも的確に素早く、春一は飛び出して彼女に手をかけていたのだ。

気が付いたら、その軽い身を引き戻しながらすっ転ばせつつ、突き出される槍の穂先をへし折っていて。

そして。

あー。

目立たず騒ぎを起こさず暮らしていた彼は、それが一瞬にして瓦解したのを知ったのだ。

やれやれ。

振り返ると、地面にへたりこんだまま、驚きで怒りも引っ込んでしまった牛蒡娘がいた。

「怒りは、そんな風に使うもんじゃないよね」

それが、千秋という少女の存在を認めた、一番最初の出来事だった。

『糸目先生』もしくは『先生』

それが、彼女が春一を表す時の言葉。

名前を聞かれてないので、教えていなかった。そのせいか、いつの間にかそんな呼び名で定着してしまったのだ。

主に『先生』と呼ぶのだが、あんまりエッチな嫌がらせが過ぎると、まれに『糸目先生！』と呼ぶ。

そんな少女と、春一は一緒に逃亡の旅をしている。

内町に入ることもせず、時折通りかかる外村で、農作業の手伝い

などをしながら食いつなぎつつ進んでいた。

農作業の手伝いをするのは仕事に慣れている千秋で、春一はというと、農民の歪んだ身体を整体などで整えてやる方が性に合っていた。

農民の身体は、朝から晩までいじめ抜かれていて、面白いほどにぱきぱきと音を立てる。

腰痛に苦しむ者も多かった。

千秋は働き者で、ちょうど収穫期の今は重宝されている。

しばらく住み込みで頼むと言われ、納屋まで借りることが出来た。

この村長はまだマシなのか、彼女のいた村ほどひどくはない。

よそから来た二人を食べさせるくらいは、何とかなっているようだ。

「先生、上掛け借りてきました」

古い綿入れの着物をひとつ、千秋が抱えてくる。

にこにこ明るい笑顔で差し出すそれを、春一はじっと見た後に、彼女の顔へと視線を動かした。

「上掛けは、ひとつだね」

「はい！ え？ あー！ わ、私はわらをかぶりますから大丈夫で

す！」

元気よく答えてから、ようやく春一の笑顔の突っ込みに気づいたようで、千秋はわたたと彼に上掛けを押し付ける。

「いや、それじゃ僕がひどい男になるんじゃないかな？」

一人だけ上掛けを使う男の図は、随分ひどい構図に見えるではないか。

「いえ、先生がひどい人じゃないのは、私、ちゃんと知ってますから、大丈夫です！」

必死にフォローする顔は可愛いが、どうも彼女は春一の思考と違う方向へとすっ飛んで行くきらいがある。

炭焼小屋で、修業している頃からそうだった。

一度捨てた命を、有効活用するのかと思いきや、彼女はいかにして『前向きに死ぬ』かと考えていたのだ。

そんなものは、国のために命を捨てる軍人に求められる精神であって、一般農民の娘である彼女が極めるべき道ではない。

なのに、千秋はその道を全速力で走っていったのだ。

出会いの槍への突進からして、彼女は随分思いつめていたのだろう。

16歳にして人生に絶望させるような国は、無駄に広い国土のせ

いでもある。

地方の町にまで中央の執政がきちんと届かず、それぞれの地域の町の長に預けるような形となっている。

そのため、地域によってひどい格差が生じることとなるのだ。

彼女が暮らしていた外村のように。

ただでさえ、無法者から守られにくい壁のない場所だ。

特に、いま外の農地にいる者のほとんどが、内町の出身であり、守られることに慣れていた者たちである。

何世代にも渡って住み続ければ、心も身体も頑丈になっていくだろうが、第一世代にはつらからう。

そういう意味では。

千秋は、第二世代になるはずだった娘だ。

ひどい理由で村にいらなくなっただが、そんな時代を経験しているせいか、痛いとか辛いとか口に出すのは悪いことだと思っているように見える。

更に、春一を「すごい先生」か何かだと勘違いしていた。

だから彼女は、彼に良い環境を準備しようと、がんばってしまうのだ。

そんなに、いい奴じゃあないんだけどねえ。

きらきらの、尊敬の眼差しがこちらに向けられる度に、春一はさ
さやかな良心が痛む時がある。

「まあ、とりあえず……一緒に寝ようか？」

渡された綿入れを広げて、千秋においでおいでと呼びかける。

「わー！ と、とんでもないです！」

彼女は、面白いくらいに大きくぴょんと飛びのくと、真っ赤にな
って逃げてしまう。

あー。

惜しいことをしたなあと、春一は苦笑した。

やっぱ、あの時、おいしくいただいとけばよかったかな、と。

春の一 2

『あの時』

千秋の覚悟は、分かりやすく春一に透けて見えていた。

もし、彼が望むのならば、千秋はその身を自分に差し出しただろう。

その申し出は、魅力的でなかったわけではない。

彼女は、人にはない美しさがある。

決して美人とは呼べないが、覚悟を決めてきりと前を向いた時は、目を引かずにはいられない独特の雰囲気醸し出す。

春一は、自分があげた着物でそれを思い知った。

いや。

その着物よりも、もっと前。

門の前で怒りを纏った後姿は、まさに圧巻だった。

春一でさえ、目を離せなかったほどのあの一瞬は、誰も彼女が農民の娘だなんて思いもしなかっただろう。

もっと気高い、違う領域に足を踏み込んだ者のそれに見えたのだ。

だから。

後味が悪くても、首を突っ込もうなんて思ってもいなかった春一が、反射的に手を出してしまったのである。

そう、彼女はとても魅力的なのだ。

なのに、千秋は胸や尻に触られることを許しながらも、こちらに詫びめいた視線を送ることがあった。

貧相な身体は、触られるに値しないとでも思っているかのように。

おかしなことを考えるなあ。

自分が触りたくないなら、春一は触らない。

触りたいと思うから触るのだ。

時折彼女の見せる、彼の見たことのない魂の燃える瞬間。

それが、本当にこの細い千秋の中に入っているのか、不思議だったのだと思う。

胸に触れば、彼女のとびきり元気な鼓動が手のひらに伝わる。

尻に触れば、もうちょっと肉をつけないと子供を産むのが大変そうだと余計なことを思う。

個人的な趣味と実益を兼ねた、理屈をつけたとしても男としては最低の行為だろう。

そんな最低な行為でも、彼の胸は痛んだりはない。

いいだろ？　僕が助けたんだし。

千秋が聞いたら卒倒するようなことを、春一は普通に考えていた。命を助けたから、その命が全部自分のものだとはまでは言わないが、近いことは思っていたのだ。

その身を助けるのに、彼もまた犠牲は払ったのである。

町に出入りする許可証が、事実上無効になったことそのものには、さしたる犠牲だとは思っていなかったが。

いかようにも使える千秋の命を、春一は自分の目を信じて育てることにした。

そのためには、まず彼女をしがらみから解放する必要があった。

あの全身から噴き出す怒りを、少し勿体ないが昇華させようと考えたのだ。

春一がやれば、ほんのわずかな時間で出来ることを、彼女自身の力で成し遂げさせることにする。

希望が達成されれば、きっと彼女は自由になるだろう。

それは、村にも帰れない形の自由だったが。

だが、春一にとっては好都合な話だ。

そうすれば、彼はその手を握って、千秋を堂々と連れ出せるのだから。

彼女も、きつと拒みはしないだろう。

ただひとつ。

心配はあった。

村長の屋敷で、彼女を助けに入る時、そこで見せる自分の姿に怯えられる可能性があったのだ。

春一の手は、いまでこそおとなしいものだが、綺麗なものではない。

炭よりも、もっと赤黒いもので汚れた時期もあった。

彼女をその道に落とすことは考えられず、しかし、千秋を羽交い絞めにして殴り飛ばし、女としてズタズタにしようとした男たちに容赦をしてやる気にもなれず、春一は本性の一部を表したのだ。

そんな彼を見て。

千秋は――怯えてはいなかった。

驚いてはいたが、その瞳には何の恐れもなく、それどころからこれまで通りの『糸目先生』を見る目だったのだ。

大した胆力だよ。

それには、春一の方が驚くほど。

だから、彼は千秋の手を握って村を出た。

宿無しの生活が始まって、彼女は毎日楽しそうにしている。

笑顔の朝を迎える度に、情愛も増していくのは、おかしい話ではない。

彼女は、深い女性になる素質があった。

その片鱗は、これまで見た姿の中に見えていたのだから。

じっくり育てて、おいしくいただきたいものだね。

困ったことに、春一は『純粹』に、本気でそんなことを考えていた。

早く、自分が食べたくたしょうがなくなるほど、素晴らしい女に育てばいい。

そのためには。

「風邪をひいている暇はないよね？」

「あ……せ、先生……」

身を固くして春一を拒む彼女の身体を、自分の綿入れの中に引っ

張り込んだのだった。

春の一 3

「先生！ 大変だ！」

地面にひいたむしろの上で、農民の身体をばきばきいわせていた春一の元に、若い男が駆け込んでくる。

千秋が『先生、先生』と連呼するものだから、村人まで同じように呼ぶようになってしまった。

全体の医者か何かだと、思われているに違いない。

「ち、千秋ちゃんが、長んとこの用心棒たちと揉めて！」

人の背中に置いた手を、春一は一度止める。

長は少々まともでも、用心棒がみなそうだとは限らない。

もともと、内町に住めないような者を雇っているわけだから、粗暴で学のない者ばかりだ。

かえって内町出身の農民の方が、よほど学があるだろう。

「見慣れないっていうんで絡まれて……男が千秋ちゃんを触ろうとして」

ああ。

話の流れ的に、オチが見えた。

春一は、背中に置いた手を再び動かし、ぱきつと言わせる。

「あだだ」

という患者の声と。

「千秋ちゃん、男を投げ飛ばしちやっただよ！」

という男の声は、ほぼ同時だった。

まあ、投げ飛ばすだろうね。

女の身体を触るのは、『春一以外』は悪い奴——千秋の身体に、彼自身がそう仕込んだのだから。

「相手は何人だったかな？」

ぱきぱきぱき。

「えっ？ えっと……三人です」

「ただいま帰りましたー」

言葉が、立て続けに交差した。

春一は、千秋の手に負えるかどうかを判断するために人数を聞いたが、男はそんな問いに戸惑って、少し答えるのに遅れる。

そこへ、当事者である本人が滑り込んできたのだ。

ぴんぴんした様子で。

走ってきたせいか、はあはあと息こそ乱れてはいるものの、千秋は無事だし笑顔も滲刺としている。

ちょっと、髪が乱れているくらいか。

そんな彼女を、春一は満足に思いながら見上げた。

ぶつとばしたら——逃げる。

千秋に足りなかった最後のものを、春一が教えたのだ。

戦い続けるのは無駄なことなので、すみやかに逃げる。

彼がそれを体言すれば、千秋は何の疑いも持たずについてくる。

ここまでの道のりで、どうやらちゃんと身についたようだ。

放っておくと、命尽きるまで戦いそうな彼女の魂を、そうして春一は整えてきた。

「そろそろ、ここも頃合のようだね」

「はい、すみません」

整体をやめて立ち上がる彼に、千秋が照れた顔で詫げる。

うん、可愛い可愛い。

春一は、そんな彼女の様子に幸せな気分を味わえる。

この村に、長居したいわけではない。

しばらく農作業の手伝いをしていた千秋だが、ここの生活に未練がないのが、よく伝わってくる。

彼女の優先順位の一番目に、しっかり春一が座っている証拠だ。

それは、嬉しいことであり、当然なことである。

「お世話になりました！」

いともあっさりと、彼女は村人に別れを告げる。

対する人たちが、ぽかんとしてしまうほどに。

「追われると面倒だから、山に入ろうかな」

挨拶も適当に、そんなことを言いながら歩き出す春一を、小走りで彼女が追ってくる。

「本当ですか？」

横から、ひよこつと疑わしげな表情が見上げてきた。

どうやら、彼の言葉を信用していないようだ。

「よく分かったね」

ぼんぽんと、その頭に手を乗せてほめてやる。

千秋のぶつとばした男たちが、人数を集めて仕返しに来る可能性があった。

あの農民たちのところへ行き、どこへ逃げたか聞くかもしれない。

だから、春一は聞こえるように『山に入る』と言ってやったのだ。追跡をかく乱するために。

その間に、さっさと距離を稼がせてもらおう。

それが、彼の立てた逃亡計画だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8880y/>

春と秋

2011年12月3日18時53分発行